

# 『地域文化のアクチュアリティ 愛媛からの発信』

愛媛大学地域創成研究センター監・シード書房刊・2006年3月・291頁

福田 安典

「地域の文化」というものを取り扱う必要が、愛媛大学にはあり、特に愛媛大学地域創成研究センターにはある、というより年々その必要性は高まりつつある。

しかしながら、いざ「地域の文化」とは何なのかと改めて問う時に、文学、美術、音楽、伝統芸能、演劇、考古学的遺物など、その解は様々であって、同一人物の中でさえ、その折々の環境や感懐によって出てくる言葉は違うだろう。その混沌とした中にまた「取り扱い方」の多様さが加わる。単なる紹介でいいのか、その評価を全国的に知らしめるべきなのか、町おこしに役立てるのか、などなど。

その複雑に絡み合った現代の愛媛文化シーンの中でも、とりあえずは「大学の仕事」としてすべきことを模索し、まがりなりにも一つの答えを出したものが本書である。

本書は3部から構成される。まず、その構成と執筆者について以下に示す。

序 論	住まうと芸術文化
	—彷徨としての帰郷、あるいは 帰郷としての彷徨—
	寿 卓三 (愛媛大学)
第一部	愛媛の芸能・演劇
序 章	松山の「演劇バブル」の時
	福田 安典 (愛媛大学)
第一章	松山東雲能について
	—現代能楽の「根っこ」—
	福田 安典
第二章	能楽座談会
	—大学生が垣間見る能の歴史と 現状—
	井上 裕久 (能 楽 師)
	渡辺 全 (愛媛能楽協会)
	堀 美智子 (愛媛能楽協会)

福田 安典

木村 康彦 (愛媛大学学生)

第三章	明治期の松山演劇事情
	—新栄座の出来るまで—
	神楽岡幼子 (愛媛大学)
第四章	芝居小屋を語り継ぐ
	—栄座の事例から—
	中原ゆかり (愛媛大学)
第五章	三木政一氏の自作講談
	中原ゆかり (愛媛大学)
第六章	芝居小屋と映画館の盛衰史
	弘岡 寧彦 (元テレビプロデューサー)
第七章	愛媛の映画人 日本映画の黎明
	を告げた松山中学出身の映画人
	伊藤大輔と伊丹万作
	富田 美香 (立命館大学)
第八章	現代の演劇シーン
	梶岡 剛 (尙まつやまアーツマネジメント)
第二部	愛媛の音楽
第一章	ジャズの魅力を伝えたい
	栗田 敬子 (ジャズピアニスト)
第二章	ピアニストの仕事と愛媛の
	音楽状況
	大澤 宣晃 (ピアニスト・松山東雲 短期大学非常勤講師)
第三章	愛媛インディーズ
	J-ポップ・J-ロックCD
	岸 啓子 (愛媛大学)
第四章	インタビュー —伊賀氏が語る—
	ライブハウス・サロンシティと マッドマガジンレコーズ
	伊賀 千晃 (サロンシティオーナー・ マッドマガジンレコーズ代表)
	田中 尚邦 (Out Audio Additions メンバー)
	岸 啓子
第五章	愛媛大学プロムナード・

コンサート2005

バッハ音律で聴くバッハの

『プレリュードとフーガ』

岸 啓子

宮武誠一（杣人バロックアンサンブル）

第六章 座談会 愛媛の音楽情況

大澤 宣晃・栗田 敬子・

寿 卓三・三上 徹（愛媛大学）

第三部 愛媛の美術

第一章 地域における美術館

－愛媛県美術館における

美術品収集の話

梶岡 秀一（愛媛県立美術館）

第二章 地域アートNPOの役割と可能性

－カコアの試み カコア

第三章 地域におけるモダンデザイン

高安 啓介（愛媛大学）

第四章 日土小学校から学ぶこと

高安 啓介

第五章 松山市のギャラリー状況と今後

千代田憲子（愛媛大学）

あとがき－「愛媛の文化は、いま」－

福田 安典

資料 松山アートスペース・松山アート

マップ・松山ミュージックマップ

煩瑣ながら、執筆陣の肩書きを記したが、まずこの豊富さを紹介したい。従来の大学の刊行物はどうしてもいわゆる「学者の世界」の閉じられた空間でなされることが多い。それに対して本書は、学生はいうに及ばず、NPOや県立美術館、能楽協会など愛媛文化シーンを牽引している人や団体、個人的にずっと愛媛の文化について研究している市井研究者をまきこんで構成した所に特徴がある。さらには、立命館大学や東雲短期大学などの他大学との連携にも成功している。

扱う内容も、伝統芸たる能楽からJ-ポップ、近代建築から現代アートまで広範であって、その点描から紡ぎ出される愛媛文化のありようを「読む」ことができる。